

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 3 日現在

機関番号：84604

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24320163

研究課題名(和文) 和同開珎の生産と流通をめぐる総合的研究

研究課題名(英文) Comprehensive Study concerning the production and distribution of Wado-kaichin

研究代表者

松村 恵司 (MATSUMURA, Keiji)

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・その他部局等・所長

研究者番号：20113433

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 10,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、全国の和同開珎出土遺跡(784遺跡、出土総数6362点)の正確な分布図を古代の国単位に作成し、駅路、駅家、国府などの位置関係から、和同開珎出土遺跡の性格を探り、古代銭貨の流通が都城と畿内周辺国に限られたとする従来の通説的理解の検証を試みた。その結果、出土遺跡が駅路沿いに分布する傾向が明確になり始め、畿外における銭貨流通が駅路沿いに展開した可能性が高まった。また、藤原宮出土の木簡の分析を通して、和同開珎の銀銭1文が銅銭10文の価値であることを明らかにし、江戸時代から続く銀・銅銭の法定比価をめぐる論争に終止符を打つことができた。

研究成果の概要(英文)：This research made an exact distribution map of Wado-Kaichin excavated from 784 sites in Japan, and verified the conventional understanding that the distribution range of ancient coins has been limited to the vicinity of the Capital and Kinai (畿内). As a result, it was found that there is a tendency which the distribution range had expanded along Ekiro (駅路). In addition, through the analysis of wooden tablet excavated from Fujiwara Palace Site, it revealed that silver coin one sentence of Wado-Kaichin had the value of copper coin 10 sentences. It was able to put an end to the controversy over the legal exchange rate of silver and copper coins from Edo period.

研究分野：考古学、貨幣史、経済史

キーワード：出土銭貨 和同開珎 和同開珎銀銭 考古学 貨幣史 貨幣経済 銭貨流通 鑄銭

## 1. 研究開始当初の背景

1999年の飛鳥池遺跡の富本銭の発見を機に、わが国の初期貨幣史研究は新たな研究段階へと突入した。研究代表者はこれまでに科学研究費補助金の助成を受けて、飛鳥・藤原宮、平城宮といった律令国家中枢部の出土銭貨を対象に、古代貨幣史の再構築に向けた一連の研究を進めてきた。その結果、我が国の初期貨幣が、新羅の一分銀とみられる無文銀銭(7世紀第3四半期を中心に流通)の貨幣的使用から、初めての中国式鑄造貨幣富本銭の発行(683年～)、銭貨の全国流通を目指した和同開珎の発行(708～760年)へと発展する歴史的過程を明らかにした。また、鑄造銅貨を基軸に据えた貨幣経済の導入が、唐の制度を模倣した律令国家体制の整備と深く関わり、富本銭や和同開珎の発行が藤原京や平城京などの中国式都城の建設と一体的に企画された可能性を明らかにした。その結果、これらの研究成果は広く社会に認知されるようになった。

## 2. 研究の目的

一連の科学研究費補助金の助成を受けてこれまでに進めた研究は、初期貨幣の研究史の整理、無文銀銭の性格や製作地の究明、富本銭の鑄造技術の復原、富本銭の銭文の出典研究、和同開珎の銭文の読み方や意味の解明などに重点を置いたため、2007・2008年度に膨大な労力を割いて収集した和同開珎出土遺跡の全国集成資料(784遺跡、出土総数6362点)を十分に分析し、研究に活かすきれない状況にあった。このため本研究では、集成資料の分析を通して、和同開珎の流通実態を考古学的に解明し、古代銭貨が都城と畿内、及びその周辺国を中心に流通したとされる従来の通説的理解の検証を目的とした。

また、和同開珎の発行により我が国は本格的な貨幣経済へと突入したが、それを支えたのは規格性の高い均質な銭貨の大量生産技術であった。本研究では、和同開珎の加工痕跡や鑄造関係遺物の分析を中心に、文献史料との統合性を図りながら和同開珎の量産を可能にした生産技術の革新と生産体制の解明を目指す。

## 3. 研究の方法

(1) 和同開珎を出土した全国784遺跡の分布図の作成に向けて、旧国単位に七道の路線、駅家、郡境、国府、国分寺の位置を入れた国郡図をデジタルトレースし、そこに地図ソフトを使用して和同開珎出土遺跡(784遺跡)の正確な位置を落とし、古代の地理的、歴史的環境下で和同開珎出土遺跡の性格を考察

する。駅路と駅家、伝路や支路などの位置やルートに関しては歴史地理学と考古学の最新の研究成果を盛り込む。

(2) また、和同開珎の銅銭に先行して発行された銀銭を対象に、その重量や銀銭関係史料の分析を通して、銀銭発行の歴史的意義を探る。さらに、藤原宮出土門勝木簡の分析を通して和同銀銭と銅銭の法定比価を究明する。

(3) 「和同開珎出土遺跡データベース」の構築と公開に向けて、データベースの設計、784遺跡にのぼる出土遺跡のデータ入力と校正作業、付図のデジタルデータ化を進める。

(4) 日本古代貨幣史の全体像を把握するため、古代銭貨の発行、流通に関する文献史料を網羅的に集成し、編年整理して「日本古代貨幣関係史料集稿」を作成する。

(5) 平城宮・京出土和同開珎の加工・仕上げ痕跡の細部観察と計測、また平城京左京三条四坊七坪出土の和同開珎銭范と飛鳥池遺跡出土富本銭銭范の比較作業など、古代銭貨の生産技術に関する分析と検討を行う。

## 4. 研究成果

(1) 初期貨幣史研究上、近年注目を集めている藤原京出土門勝木簡を再検討し、木簡に記された「銀五両二文布三尋分 布十一端」の「布三尋」の意味について、一分銀(無文銀銭)以下の価値を示す補助計算手段として尋布が用いられ、一分銀以下を四進法の尋布で価値表示する構造を明らかにした。その結果、銀から物品への換算に際して、賦役令調絹絶条に定められた価値体系が算定基準となり、和同開珎の銀・銅銭の発行当初の交換比率が、銀1分=和同銀銭1文=和同銅銭10文であることが明らかになった。これにより和同銀・銅銭の交換比率をめぐる江戸時代以来の論争に終止符を打つことができた。あわせて和同銀銭の発行目的や使用の停止理由を明らかにした。

(2) 科研の中間研究報告として2014年3月に『和同開珎の生産と流通(一)』(A4版140頁)を刊行し、日本古代貨幣史・経済史に関連する文献史料を網羅的に集成・編年した「日本古代貨幣関係史料集稿(一)」を収録した。

(3) 「和同開珎出土遺跡データベース」の構築と公開に向けて、データベースの設計、データ入力と校正作業、付図のデジタルデータ化を進めた結果、2015年度中に奈良文化財研究所のホームページ上で公開できる見通しが立った。

(4) 和同開珎の生産技術の復元に関しては、平城宮・京出土の和同開珎を対象に、写真データと計測データの整備を進めた。

(5) 和同開珎出土遺跡分布図の作成に向けて、旧国単位の国郡図をデジタルトレースし、地図ソフトを使用して和同開珎出土遺跡の正確な地点を落とす作業を継続したが、七道のルート復元や駅家の位置の不確定な国も多く、歴史地理学による古代道路(駅路・伝路)の路線復元や、駅家比定に関する最新の研究成果の収集と評価に手間取り、研究計画に大幅な遅延が生じた。そうしたなか、作業の進捗に伴って、和同開珎出土遺跡が七道の路線沿いに分布する傾向が明瞭になり始めた。これは和銅初年に相次いで出された律令国家の貨幣使用奨励策、そのなかでも特に運脚夫や役夫の帰郷対策と密接に関係した現象と推測できるようになった。すなわち、調庸運脚や役夫の帰郷時の飢苦を救済するために、彼らに銭貨を所持させ、郡司や富豪の家に交通の要所で米の販売を命じた和銅5年(712)10月乙丑条や翌6年3月壬午の詔との関係が推測され、これを契機に駅路沿いに銭貨流通が進展した可能性が浮上した。

(6) こうした畿外における銭貨流通の実態を解明するため、発掘調査で明らかになった官衙関連遺跡、港湾遺跡、初期荘園、古代寺院などの遺跡分布図を旧国単位の新たに作成し、在地の歴史的環境下で和同開珎出土遺跡の性格を分析、検討する作業が不可欠となった。このため、前年度申請をおこない研究を再構築することにした。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

##### [雑誌論文](計5件)

松村 恵司、古代の縹銭、出土銭貨、第35号、出土銭貨研究会、査読無、2015、47 - 63

松村 恵司、お金の源 素材の歴史と作り方 銅貨、にちぎん、第41号、査読無、2015、20 - 23

松村 恵司、古代銭貨研究と研究史、出土銭貨、第33号、出土銭貨研究会、査読無、2014、5-6

松村 恵司、富本銭から貨幣の始まりを考える、史友、第46号、青山学院大学史学会、査読無、2014、1 - 22

松村 恵司、和同銀銭をめぐる史的検討、奈良文化財研究所創立60周年記念論文集、文化財論叢、奈良文化財研究所、査読無、2012、367 - 378

##### [学会発表](計9件)

松村 恵司、和同開珎一文の価値は、奈良文化財研究所第115回公開講演会、2014年10月4日、奈良文化財研究所

松村 恵司、和同開珎の銭文と和銅改元詔、第64回法隆寺夏季大学、2014年7月28日、法隆寺

松村 恵司、藤原宮の地鎮と富本銭、奈良文化財研究所第114回公開講演会、2014年6月28日、奈良文化財研究所

松村 恵司、飛鳥・藤原の遺跡が語る古代国家誕生の軌跡、飛鳥・藤原世界遺産登録の意義を考える講演会、2014年6月14日、かしはら万葉ホール

松村 恵司、奈良時代の貨幣と経済、大和文化会、2014年2月22日、銀座プロッサム中央会館

松村 恵司、富本銭から貨幣の始まりを考える 都城造営と貨幣発行、青山学院大学史学会、2013年11月30日、青山学院大学

松村 恵司、富本銭と藤原京 貨幣の発行と都城造営、奈良文化財研究所第113回公開講演会、2013年10月26日、奈良文化財研究所

松村 恵司、貨幣とは何か 最古の貨幣をめぐる議論、奈良文化財研究所第112回公開講演会、2013年6月29日、奈良文化財研究所

松村 恵司、富本銭再考 富本・七曜の思想、第63回法隆寺夏季大学、2012年7月28日、法隆寺

##### [図書](計2件)

松村 恵司他、和同開珎の生産と流通(一)、2014、142

松村 恵司他、ここまでわかった日本の歴史 古代、日本発掘、朝日新聞出版、2015、186 - 221

##### [その他]

松村 恵司、お金の始まり 探検! 奈文研 2、読売新聞 2013年4月14日朝刊

松村 恵司、和同開珎の読み方は 探検! 奈文研 101、読売新聞 2015年4月26日朝刊

松村 恵司、律令国家を支えた工房、飛鳥むかしむかし 53、朝日新聞 2014年9月5日朝刊

松村 恵司、富本銭の生産、飛鳥むかしむかし 56、朝日新聞 2014年9月26日朝刊

6 . 研究組織

(1)研究代表者

松村 恵司 ( MATSUMURA , Keiji )

独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財  
研究所・所長

研究者番号：2 0 1 1 3 4 3 3